ロムバッハの構造存在論における「現象」と「存在」の問題

―ロムバッハの前期ハイデッガー解釈に関する一考察―

氏名　山中健義　（学習院大学）

本発表の目的は、ハインリッヒ・ロムバッハ（Heinrich Rombach, 1923-2004）の「構造存在論」（Strukturontologie）において、前期ハイデッガー哲学がいかに解釈されているかを、とくに「現象」と「存在」をめぐる問題に焦点をあてて明らかにすることである。

構造存在論はロムバッハの哲学的立場のひとつであるが、その重要著作『実体・体系・構造』（1965/1966 年）の第二巻の巻末で、同書全体が『存在と時間』第 7 節における「存在論は現象学によってのみ可能である」のテーゼによって導かれていることを述べている。また、後年の『現在的意識の現象学』（1980 年）においても、ハイデッガーの上述のテーゼへの言及がある。ロムバッハにとって現象学と存在論とは別のものではなく、「構造現象学」という同義的な表現に見受けられるように、両者は同一のものとして捉えられている。だとすると、なぜ構造存在論は「存在論」と呼ばれるのか。構造存在論は従来の伝統的な存在ではなく、存在の生成ないし運動を問う。それゆえ、力動論や生成論とも称されるが、ロムバッハは一貫して「存在論」の表現を採用する。先行研究からも明らかなように、構造存在論は生成の根源的次元へ遡及することで、新たな「存在」概念、「存在論」の提示の試みであるが、そうとはいえ、ロムバッハがなぜ「存在」ないし「存在論」を主張し続けるのかは依然不明瞭である。この問題にはおそらくハイデッガーの基礎的存在論の問題系が大きく関係している。ロムバッハはそれを独自の仕方で深化させようとする。

以上の問題に対し十分な解答を与えている先行研究は、管見の限り、あまり見られない。これらを明らかにすることで、ロムバッハの前期ハイデッガー受容を特徴づけ、構造存在論の独自性を際立たせることができるであろう。

そこで本発表では、考察の出発点として、まず『存在と時間』序論第 7 節に立ち戻り、ハイデッガーの立場を整理しながら現象学と存在論との関係性を確認する。次に、ハイデッガーのテーゼに対するロムバッハの解釈を確認すべく、『現在的意識の現象学』第二章の記述を中心に、関連する他の著作、論文のテクストをも参照しながら、ハイデッガーの存在論的現象学をロムバッハがいかに解釈しているかを検討する。ロムバッハが前期ハイデッガー哲学のいかなる点を評価し、そしてまたいかなる点に不備を見ているのか。これらを跡付ける作業を通して、ロムバッハの問題意識を明確にし、構造存在論の立場を浮き彫りにすることを目指す。